

河野千絵

（平成三十年十月号）

百合の花弁の上で繋がり動かざる緑色の蜘蛛と狩られたる蟻
蟻の腹部をがちりと咬んでいる者の小さき双眼に私を映す
蝶も蜘蛛も眠る夜半にしんしんと百合は香れり自らのため
生きている証とばかり自らの花卉を花粉で汚しつつ立つ
百合の葉と花卉は感触の似ていると蟻は思うか登り降りして
夏の夜の風の重さの溜まれるを常夜灯のごと香りいる百合
香草に明滅しつつ近づくは螢火と気づくまでのひととき



●作者の言葉

このたびは素敵な賞を頂戴し、とても嬉しく、大いに励まされました。どうもありがとうございました。わが家の庭

の一角には、毎年、百合が咲いてくれます。大ぶりの百合は香り高く生気に満ちて、多くの虫を呼びます。私も呼ばれて近づくと、普段は秘され

ているこの世の風景のひとこまを、垣間見せてもらえるように思います。

「心の花」の先輩歌人の方々は、魅力的な自然詠をたくさん作っておられます。先輩の方々がご覧になった百合に、眼前の百合をちよつと重ねて、ふたたび遠く憧れます。

選者の言葉

短歌を選ぶとき、表現に限れば、表現が巧みな作品はレトリックを味わうものだと考えている。表現が破綻している作品は作者のエネルギーを受けとめるものだと考えている。河野さんはテーマによって技巧に凝ったり、破綻を目論んだりする（ようにわたしには思える）。

それは表現の質感を大事にすることにつながるのだろう。時によって人間の息づかいが聞こえないこともあれば、慟哭を聞かされることもある。ただしどんな時も定型を大きくはみ出すことはない。

十月号の作品は、観察すれば作れる作品ではなく、日頃から不可思議を喜ぶいきかたをしている人が見つけた小さな世界の生き死にの模様の静けさが出色である。